

「おとうさん、ごめんね・・・」

その年は、大型台風が間もなく上陸する前夜で大雨が降っていた。

娘は玄関のたたきに、まだ一歳にもならない赤ん坊を抱いて泣いている。その濡れ鼠の哀れな姿が私の老後の始まりだった。私は定年を間近にしている、古い家の売却を考え、住まいを駅近くのマンションに移ることや、果たせなかった妻への約束などを計画していた。その他何もかもが娘の出戻りから消え失せてしまったのだ。

その後、四人での生活は何をおいても娘と孫だ。特に孫娘のせつ子が一番だった。少し言葉話を話すようになると、私のことを「おとう」と呼ぶようになった。まだ年端もいかにいせつ子は自身に降りかかった境遇など知る由もない。

おはじきで一人遊びに飽きてくると「おとう・・・」と、呼んではすり寄ってくる。その無邪気な仕草と澄み切った瞳に私は降参して、おはじき遊びの仲間になった。

「ひい、ふう、み・・・」

「いつ、むー、やー」

いよいよ定年を迎えると暗黙の了解で、私が子守役に転じてしまう。すでに娘も妻もパートで忙しい。娘は仕事ぶりを認められて社員となった。次第に帰宅も遅くなれば、当然のごとく子守役だけでなく、私は家事全般もやらざるを得なくなっていた。

「おとうさん。せつ子の保育園参観、お願いね」

その頃になると、子育ても家事も苦になるどころか妙な充実感も湧いてきて調理器具もこだわりを持って集めるようになった。園のお迎えの帰りにはせつ子と一緒に買い物をし、近所の駄菓子屋の常連にもなった。

「今日は、オムライス？」

「うん、せつ子の大好きな、チーズも入れようね」

ある日、せつ子が扁桃腺にかかった。ひどい熱と咽喉の痛みで声も出ない。慌てて医者に駆け込んで診てもらったが、食事でも咽喉を通らず三日三晩苦しんだ。お粥を煮詰めて液状にし、卵を溶いて食べさせても痛みがあつて苦しそうだ。私も子供の頃度々扁桃腺を患ったからよくわかる。その昔、祖母が作ってくれた葛湯のやさしい咽喉越しを思い出した。

せつ子も美味しかったのだろう。「おとう・・・」と催促して、舐めるように食べては笑顔を見せた。そして、ようやく眠りにつこうとするせつ子に添い寝したら、私の顔に小さな

手を置いてザラザラな無精ひげをなぞった。せつ子は私の無精ひげが好きなのだ。そして、安心したように眼をつむって、真珠のような涙をこぼした。

扁桃腺が治ってからは誰よりも一層私になつくようになった。小学校に上がると、私もようやく自由な時間もできて、唯一の趣味である油絵を描きに近くのピオトープに出掛けることがあった。時間を忘れてスケッチしているとせつ子の声がする。

「おとう、・・・おとう」と、声高に叫んで私を探している。

私を見付けるとまとわりついて離れようとしめない。だから一人スケッチはもう終わり。でも気分は壊れない。せつ子と私はいつも一緒に仲よしこよし、もうせつ子のいない老後など考えられない。帰り道につないだ小さな手が愛おしくてしかたがなかった。

好天が続く初夏。私は思い付いたように物置を漁って南部風鈴を探し出した。祖母の葬儀以来これまであらためることもなかった。風鈴は艶もなく錆も出ているが「チリーン」と、変わらぬ良い音で鳴った。

一つ鳴らすと、白い雲。二つ鳴らすと、会津の長閑な田園風景と祖母の笑顔が浮ぶ。そして何故か、胸の詰まるような懐かしい涼風がそよいでくるのだ。

「おとう、なにしてる?」

「風鈴を吊るすんだ」

「風鈴?」

「ああ、・・・」

この南部風鈴の涼やかに響く音は、私が記憶を宿した日から祖母の元を離れる日まで、共に愛した音色なのだ。祖母と二人で最後に聞いたのは一体何年前の夏だったろうか。

○

幼い頃私は、祖母が行商するリヤカーにちよこんと乗せられ、季節の野菜や切り花と一緒に会津若松駅近くの町場まで小一時間近く掛けて通っていた。遠くに見える山々と大きく聳え立つ磐梯山に見下ろされ、長閑な田園の中をリヤカーに乗ってよく通った。私は切り花を挿したバケツにつかまりながら、リヤカーを引く祖母の背中を見て育ったのだ。

私の生母は、私を生んですぐ病気で亡くなった。

祖父は私の母を亡くしたのは自分の責任だと言って、祖父母の手で私を育てる決心をした。農家は人手がいるので間もなく父は再婚し、義母との間に弟を生んだ。私と弟とは2歳違いなので、手の掛かる幼い私を義母に預ける遠慮もあったと思う。

しかし、その祖父も私が4歳になると突然の病気で亡くなってしまった。ずっと後で知ったことだが、祖父が祖母だけに残した遺言があったと聞く。きっとそれが誓約となって、私が生母の死を知らされずに育てられることになったのだ。北向きの座敷が寝所となり祖母と二人だけで暮らすことになったのも、そうした理由からかもしれない。だから、私が記憶を宿した日から、両親や弟と同じ部屋で枕を並べることは一度もなかった。また、北の座敷は中学3年の冬まで、14年近くも祖母と二人で暮らしたことになる。

私が故郷を出たのは東京の美術大学に進学を目指してからになるが、そのまま今に至るまで、住まいを故郷へ戻そうなどとは一度も考えたことはない。それは祖母との暗黙の誓いでもあるのだけれど、祖母との暮らしから脱皮することを考え出したのは、生母の死を知った時から何となく自分で決めたことでもある。

しかし、生母や祖父の墓参りを名目に、年に一度の里帰りを欠かすことはなかった。その故郷へ足を向ける最大の楽しみは、迎える祖母の変わらぬ笑顔に包まれることだった。

古くから城下町で栄えた会津では数え歳で喜寿を祝う習慣がある。祖母が76歳を迎えた年、父親は盆休みに喜寿祝いの会を計画した。子供、孫、曾孫達ばかりか分家まで呼ぶというので、半年も前から事あるごとに父から細かな連絡があった。私は妻帯して1年足らずと間もない紀子を伴って、盆休みの真ただ中、大渋滞覚悟で帰郷した。

実家は百年以上も経つ古民家で敷地も天井も高く大きかった。南側座敷の床の間には大きな花瓶に生花が活けてあり、そこに掛軸は珍しく二幅あった。一幅は、網籠を腰に付けた姉さん被りの祖母が手を伸ばして梅を取る水墨画で、私が高校の美術部にいた頃、祖母をモデルに描いたものだ。対に描いたもう一枚も、梅酒を仕込むため梅のヘタ取りする祖母が描かれてある。私は懐かしい思いで掛軸を見ていた。そして、この自分の絵を立派すぎる表装に仕立てたのは誰だろうと考えていた。

妻の紀子が、梅の実を取る絵の方を指差して言った。

「振り向いたお婆ちゃんの顔が、良く似ているわ」

「そうか？でも、腰の曲がった婆ちゃしか、ノリちゃんは知らないだろう？」

「さつき、会って話したけど、そんなに曲がっていないわよ」

「えっ、もう会ったの？」

「小屋の方にいるわ。お婆ちゃんはご自分の祝い事なのに、お父さんの手伝い事をして
いるの。本当に元気そうで立派だわ」

私も母屋続きの小屋を覗きに行った。祖母は絵のように変らぬ姉さん被りの姿で、樽に
漬けた小茄子をせっせと取り出しているところだ。

ようやく私の姿に気付くと、照れくさそうな笑顔を見せた。

「・・・やす坊の好物だべや、ほれッ・食べてみんせ」

そう言っつて、小茄子を手掴みで私の口に放り込んだ。祖母にとって私はいつまでも子供
なのだ。

喜寿祝いは結婚式と違ってかしまるところがない。皆、気楽に好きなこと言っつて楽し
んでいた。宴会が終わり、後片づけは田舎の習慣でそれぞれの家族の女性達が分担して手
伝いをする。それも終えて皆帰っていった。賑わいから一転すると、広い古民家の中は急
にシンと静まり返るような感じがした。もう、私の妻を入れて6人だけだ。

義母は、風呂が沸いたから入れと言いにきた。

私と弟と父の三人は居間でまだ酒を酌み交わしている。父が近い内に家を建て直すのと、
弟がその年の秋に結婚式を挙げるのでいろいろ相談事をしているのだ。

「ノリちゃんに、先に入ってもらえ」と、父が言った。

お喋りの妻は、祖母と座敷で楽しそうに話しながら床づくりをしていた。

すると義母は、祖母と一緒にいる妻に声も掛けずにどこかへ行った。

義母は本家の親族が集まると、どこにいるのか見当たらなくなる。私の気のせいでもな
さそうで、後妻であることの引け目を感じているのだろうか。だけど、義母はつましい
性格とは全く違って、私の強さや気丈なところは祖母以上だった。私が小さい時分から、
祖母と義母が仲良く話し合う姿を見たことがない。特別に言い争うこともないのだが、目
を合わすこともしないのはお互い傷つかぬようにしているだけだ。この妙な、息の詰まる
雰囲気の中で私はとうとう慣れないまま年を重ねてきた。

私はゼロ歳にして母親を亡くしたが、そのことを知ったのは小学2年生の時で早かった。
分家の次男坊は田舎には珍しくヘラヘラとお節介な子供で、私は特に嫌っていた。

「お前の母ちゃんは、本当の母ちゃんじゃねえ・・・本当の母ちゃんは、とうに死んだべや・・・」

それは私にとって初めて耳にする話だった。

私は義母のことを「母ちゃん」と呼んではいたが、実母でないことくらいうすうす感じていた。弟は囲炉裏のある一段下がった場所の東の小部屋で、いつも両親と三人で寝ていた。私は記憶を宿した日から両親と枕を並べて寝ることはなかった。しかし、北の座敷で祖母と二人で寝ることに不自然を感じたこともない。私にとって祖母は実母以上の存在だから、実母の存在などどうでもいいと思っている。むしろ家の者皆が私を気遣って、その事実を隠し通してくれる気持ちが嬉しかった。

喜寿祝いその夜は座敷に蚊帳を吊って、私を真ん中に祖母と妻と布団を三つ並べて休んだ。昔のように障子戸も廊下のガラス戸も皆開け放して寝た。妻は後片付けの疲れからか早くに寝息を立てている。

掛け軸の表装のことを父に聞けば、やはり祖母が頼んで作らせたと言う。ずい分お金も掛けたと聞いた。

「婆ちゃんは、何でも捨ててしまうから、てつきり捨てられたかと思ってた」

「やす坊のもんじゃで、捨てられめー」

「そうかあー・・・二枚も、立派な表装で申し訳ねえーな」

「ええ絵じゃねー。わしの女ぶりも、まんざらじゃねーべ」

昔は、面と向かって褒めることなどなかった。私のすることを一番に褒めたのは紀子を結婚相手と決めて紹介したことだった。妻は祖母の話す古い会津弁を特別な興味を持って理解しようとした。江戸っ子で明るい性格だし、嫌みのないそのお喋りは祖母と義母の気まずい空気も吹き飛ばした。それが家の者皆に好かれた理由だ。

「和夫の結婚式終えたら、家を建て替えるの知ってるだろ？・・・親父のその凶面見たら、婆ちゃんの部屋はやっぱ北の座敷じゃな」

「わしの部屋など、もうじき死ぬからいらんと言ってるべ」

「もうじき死ぬは、20年前からだべ。親父も痺れきらしたんだべなー」

「そうか。観念したか？」

そんな悪ふざけを言っ二人で笑った。祖母とは言い争いもするが、二人だけが理解できる悪ノリの会話は昔とちっとも変わらない。

祖母は小さい声で、

「いつまで、いれるんか？」と、聞いた。

帰郷する度、別れがある。祖母を一人置いて行くようで、後ろ髪を引かれる思いはいつもながら辛かった。

「明日、帰るべ・・・」

「・・・」

裏庭から風が入ってきて、南部風鈴が「チリーン」と、良い音で鳴った。

思わず私はつぶやいた。

「いい音だな・・・」

「変わるん、いい音じゃ・・・」

喜寿祝いの賑やかさで、この風鈴があるのに気付かなかった。

二人にとってこの風鈴は、座敷で祖母と暮らした思い出の全てだった。南部風鈴には二人だけの大切な秘密がある。私は、懐かしいその秘密の中に深く埋没している。眠ろうとしない祖母も、おそらく同じだ。

○

私が小学校に入りたては、学校から帰ると、

「婆ちゃー、婆ちゃー」と大声で呼んで、見つかるまで探し回ったものだ。

祖母は裏の畑か、神社側の畑か、そうでなければ小屋にいて、

「おーい、ここじゃ、ここじゃー」と、私を呼んだ。

祖母を見付けるとすぐに会津木綿のモンペや野良着を掴んで、その木綿の肌触りを感じるのが癖だった。畑仕事の終えるのを待つ辛抱がなくなると、傍を離れず邪魔をした。近所の人からは『やす坊は、キイ婆の飼い犬みてだ』と、ひやかされたこともある。

私は幼い時から夏が大好きだった。

座敷廊下の雨戸を開放すると、裏庭の梅の木と赤松の木が大きくそびえていて、その間には丹精込めて耕す祖母の花畑がある。花畑の先には、広々と田んぼが隣村までズーッと続いて、実に見晴らしがいい。北向きの座敷は水を満たした田んぼからの風が涼風となって吹き抜けた。

「チリーン、チリーン」

夏の夜は雨戸も障子も開け放して蚊帳の中に祖母と二人で寝た。隣村まで灯りはないから夕闇からアツという間に真っ暗になる。気の早いカエルが鳴きはじめると、数えきれない蛍の光が庭を飛び回り、廊下をぬけて座敷まで迷いながら入り込んでくる。『チリーン』となる風鈴に誘われ、怪しく明滅する蛍の光が緑に染めた麻蚊帳の中へ、忍のごとく入ってくるような気がした。そして風鈴が音を発てない寝苦しい夜は、祖母がいつも傍に居て、団扇で私を扇いでくれた。風鈴の音や蛍と共に北の座敷には無償の愛と優しさが漂っていたのだ。

私が小学4年になる頃、東京オリンピックが1年と経たず開催される。世の中も忙しく変貌していく時期だった。私も大人になろうとする変化から、妙な理論武装を持って祖母を言い負かすようになった。祖母に変化が起きたのはそうした言い争いも頻繁になっていく頃で、離れて行こうとする私を見て寂しいと感じたのかもしれない。

「どうせ、わしは、もうじき死んでしまうべや・・・」

他愛無い出来事の正否やモノの考え方の違いを、私と祖母の間で言い争うと『もうすぐ死ぬ』を、何度も使って終いを締めた。特別、祖母の健康に変化の兆しがあったわけではない。しかし、何やら身仕舞をする様子が目につくようになった。

「もうすぐ、死ぬ人の言うことくらい聞いてもよからう」などと、つぶやいて情けを誘おうとする。

私は下手な芝居と思っけていても、その頃、祖母が押し入れや長持などを開いて古い手紙や着物など少しずつ処分しているのを知ってからは、下手な芝居と片付けるわけにもいかない。座敷隣の部屋は物置部屋のようになっていて、古い織機や組紐など作る道具などもあった。私が学校から帰ると、裏の畑でそれらを燃やしている祖母の姿を何度か見たことがある。

「思い出の品でも、肝心のわしがこの世にいなくなれば、残された家の者には意味ない物ばかりだべ」

「病気などしねえし、元気じゃねえーか。ちよつと思ひ切り良過ぎるべ」

「んじゃー、やす坊が使うがか？」

意外に祖母は元気なもので、そうした物入れや押し入れに大きく隙間が増えてくると、身も軽くなって不思議に爽快な気分になるのだと笑っていた。確かに、以前より意欲的なことを感じさせることの方が多くなった。

「わしの言うことを、やす坊は古い古いと言いつたが、そうかもしれんなー。物を捨てて見たら、新しことが気になってワクワクしてくるわなあ・・・」

昭和40年代頃は、日本中何処の田舎でも電化製品や農耕機械など次から次と出てきて、生活も世の中も忙しく変動していく時期でもあった。ある日祖母は、新しく買ったばかりの2層式洗濯機の前に立って脱水槽のフタを開けたり閉じたりしていた。

「偉いもん考えたなー、フタを開けると止まりよるわ」

また、しばらくすると町の電気屋がカラーテレビを持ってきた。その夜テレビをつけたらプロレスをやっていて、ジャイアント馬場のパンツが赤く鮮やかに映った。

「馬場は赤パンかあ・・・」祖母が、そう言って笑った。

今度はデストロイヤーが、馬場に絡みついて寝技を掛けた。

「やす坊！あれはなんじゃ？」

「四の字固めだべ」

「四の字固めか・・・偉いもん考えたなー・・・」

私が中学になると背丈も祖母を抜いて、父に迫る勢いで伸び出した。少し声変わりもして大人びていく。せわしく季節が巡って中学初めの夏休みが来た。すぐに北の座敷は重い雨戸を開け放し、廊下を隔てる障子戸も取り外されて夏模様に一変してしまう。田んぼや花畑の咽かえる青い香りが座敷奥まで匂い発つと、私は大好きな夏を全身に浴びるように胸を高鳴らせている。

そこには何もなくてもいい。ただ、座敷廊下に佇んでいるだけで、何よりも、誰よりも、幸せな気分になるのは実に不思議だった。

私は遊びや勉強に飽きるといつも好んで座敷廊下に寝転んだ。そこに寝転んで見上げれば、鴨居から吊るされた南部風鈴がくるくる回って「チリーン」と鳴らす。静かに、そして長く心地良い音色を響かせる。まるで風が語り掛けてくるようで、私はジッと耳を澄ましたままいつまでも飽きずに聞いていた。そんな風を感じながら夏空に浮かぶ白い雲を眺めていると、真綿に包まれるようなやすらぎが漂ってくる。

そして、それが母なのか、祖母なのか判然としないのだが、あの白い雲で包む人は、その二人のどちらかだと感じながら夢の中へ落ちていってしまうのだ。

ところが時期が過ぎてても、鴨居に吊るすはずの風鈴は提げられなかった。

祖母は忘れていたのだ。仕方なしに私は座敷の戸棚や押し入れなど思い付くところを探しまわった。しかし、隣部屋の物置にもどこにも見つからない。その時、ふと、祖母の顔が浮かんだ。相変わらず思い付くたび物を捨てている。もしや祖母が捨てたものかと思い、居間の火鉢の前で縫物をしていた祖母に聞いてみた。

「婆ちゃ、もしかして、あの風鈴も捨てたんかあ？」

「・・・」

祖母はそれに返事をせずに、針に糸を通して欲しいと言う。

「・・・？」

大切なものを失うことの真剣な問い掛けに、祖母のとぼけた無神経な頼み事を受け、一瞬言葉を失いかけた。

すぐに私は、カッと熱くなつて大声を出した。

「風鈴どうした！・・・」

「なんだ、やす坊・怖え顔してー」

「風鈴、捨てたのか？と、聞いているんじや」

「あれは燃えんから、まだ、どつかにあるべえ」

「風鈴は、爺ちやが農業研修に行った土産だと言って、大事にしていたべや・・・」

「よう憶えているのー」

「あれは爺ちやの形見でねえのか？・おらに相談なしで勝手に捨てるなよ」

「新し時代の者が、あげなもん、大事がか？」

「ああ、大事だ。おらの一番大事なものじゃ・婆ちやにとつても大事なものじゃ。それが、わかんねえかよ」

「小屋になかったら、また買ってやるべ」

「いらん！・・・婆ちや、頭壊れたべや。しつかりせいよ・バカ！」

百年も経つ農家の屋敷だから母屋も大きく軒を並べて小屋も大小3つもある。母屋続きの東側の小屋はまだ探していない。

その小屋の中二階には古い長持が幾つもあつて、農具とは別に物置として使用していた。しかし、祖母の大事な物は何でもここにしまうから、ひよつとしたらどこかの長持にあるかもしれないと思った。それぞれの長持を開ける度に埃が舞って息苦しい。更に暗いばかりでなく小屋は蒸してやけに暑かった。

私は祖母の平然とした無神経に苛立っている。汗と埃にまみれながら意地でも探そうと

我慢した。小一時間も探しただろうか、とうとう風鈴は見つからなかった。悔しい思いから、代わりに祖母の巾着袋に入った手帳を見付けて持ち出した。

居間に戻ると、祖母はすぐ声を掛けた。

「めつけたか？」

「しらん！」

傍にあった座布団を蹴飛ばして座敷廊下の勉強部屋へ行った。

文机の横にはいつの間にか蚊取り線香が焚いてある。蚊取り線香の匂いを嗅ぐと、やぶ蚊に刺されやすい私は落ち着ついた気持ちになる。祖母はそれを知って点けてくれたのだ。しかし、私の高ぶりは治まろうとしなかった。

風鈴の音色は祖母と二人で生活した大事な証だ。いつの日か私はこの家を離れる。もう、それは誰にも止められない現実だろう。祖母もその事を覚悟しているはずだ。そう考えると訳もなくあの風鈴が大事に思えてくるのだ。私は祖母を前にしてうまくその思いを伝えられない。そんなこと言わなくてもわかるだろうと怒っているのだ。しかし、祖母がそう思っていないのかと考えると無性に悔しくなる。

私は文机に座って小屋で見つけた巾着袋を開けて見た。古い汚れた手帳に二枚の写真が挿んであった。

大きな写真は祖父の伊勢講の記念写真で、小さな一枚の写真は白いブラウスを着た見知らぬ女性の写真だった。すぐに自分の母親だろうと思った。写真の裏にはアルバムから外された糊の跡が付いているから間違いなく自分の母親だと確信した。まさか見合い写真でもないだろう。二十歳にもならないような、化粧気のない田舎娘の白黒写真だった。

私が初めて見る母親の顔写真なのに特別な感情が湧いてこない。足を裏庭に投げ出し横になると、夏空の白い雲に夕日が射して赤く染まろうとしていた。

私は手帳と写真を持って、祖母の煙草盆の前に置いた。

「それ、大事なもんじゃろ」

「・・・」

「その写真は、おらの本当の母親だべ」

「どこで、めつけた」

「婆ちゃんの長持の中だべ・・・なんちゅう名前じゃ・・・」

祖母は、ジッと伏せるように小さな写真に見入っていたが、これまで見たこともないよ

うな哀しい顔を向けた。

「・・・知つとるのか？」

「ああ、ずーっと昔に聞いて知つとったが」

「誰に聞いた・・・いつから知つとった」

「誰でもよかるう。聞かずとも、昔からわかつとるが・・・」

「・・・この写真どうするが？」

「写真など、いらん・・・けど、名前だけ教えてくれる・・・婆ちやの口から聞きてえだ。

それぐらい、よかんべや・・・」

祖母は怒つたような辛い顔をして座敷隣の部屋に行った。そして、文箱を持って戻つてくると、その中の和紙に書かれた書き付けを広げて黙って私に手渡した。

書き付けには真ん中に黒く太く「康夫」と筆書きされて、左下に両親の名前が書かれてある。父の名前と並んで「母 八重子」と書かれてあつた。私が生まれ、祖父が命名した書付だつた。

祖母の目がいつの間にか潤んでいる。初めて見る祖母の涙だ。

私も祖母も言葉が出ない。何を話したらいいかわからないで二人は佇んでいた。祖母が手拭いで涙をしきりに拭っている。

すると、突如として私の胸が「ズン」と鳴つた。胸の奥から白い雲がモクモクと膨らんで口から溢れ出そうだ。目頭が熱くなって痛い。祖母の泣く姿が涙で歪んだ。

私が祖母の肩を手で擦ると、小さく痩せてしまった肩が震えている。

「婆ちや・・・なんも変わらんぞ・・・おらー、婆ちやがいれば何もいらねべ」

私が言葉に出せる、それが精一杯の本音だつた。

「・・・そうか・・・この写真もいらねのか？」

「ああ、いらねーッ、おらには風鈴の方が大事だべ」

「風鈴は、捨てた覚えはねえぞ」

「小屋は皆探したが、ねがつたべ」

「わしと、やす坊の大事なもんじゃも・・・」そう言って、言葉を詰まらせた。

やっぱり祖母は大好きな夏空の白い雲だ。一番に大切な人だ。その日から私は変わった。祖母も重い荷物を下ろしたように変わっていった。

しばらく日が経って、父が風鈴を見付けてきた。

祖母が父に風鈴のことを話して探さしたらしい。義母が納戸代りにしている西の小屋にあったという。義母は祖母が捨てた物と思ってその風鈴を納戸にしまったのだ。

「母ちゃんらしべー。あの小屋はチラツと見たけんど、ガラクタばかりだ」

「んだな。何でんかんでん、貯め込むけーナツ。まったく、わしと正反対だべな・・やす坊、どっちやがええか？」

「どっちやも、どっちやだべー。過ぎたるは及ばざるが如しサ・・」

風鈴が見付かったこともあつて二人は陽気なことを言い合つて笑つた。

私は早速座敷へ行つて、風鈴の風切短冊に小さく「康夫 祖母キイ 母八重子」と書いて祖母にそれを見せた。そして、その南部風鈴を提げて二人で両手を合わせた。

祖母は目を潤まして、

「やす坊らしべー」と、言つた。

「もう、風鈴、捨てられめえー」

祖母は89歳まで生きて大往生を遂げた。私は秘密の書き付けのある風切短冊を外して、祖母の棺に入れた。

○

「風鈴？」

「ああ、・・せつ子と、おとうの仲良し風鈴だ」

私は風鈴に風切り短冊を付けるため、本のしおりに康夫と自分の名前を書き、せつ子にも名前を書くように促した。それを軒下に吊るして風鈴を鳴らした。

「チリ、リーーン」

「いい音・・ネツ」

「そうか、せつ子も好きか？」

夜の闇に消え入りそうに響く風鈴の音色は、私と祖母、私とせつ子、この不思議な巡り合わせを奏でるように・・優しく・・静かに鳴つた。

完